ひたる處にして其の大内裏の碧瓦の如きは碧色に刷りなして原品を髣髴するに近きものあり、最も欣ぶ可しとなす。（非賣品、小川氏印行）〔以上梅原〕

彙　報

●史學科學生見學旅行

十一月四、五兩日を期して喜田教授指導の下に大和飛鳥地方に見學旅行を行ふ。參加者は助手學生十五名なり。

四日正午京都驛を發し、奈良に下車して約一時間自由行動を取る。數名の者は博物館に到り折柄展覽の諸曼荼羅を一覽し、再び乘車して眞屋造りの村落古墳所々に散在する大和平野の東端を南走し、大和神社崇神天皇陵三輪神社等を車窓より拜し、飛鳥三山に迎へられて櫻井驛に下車す。かくて阿倍文殊に到り、丸塚三個を見る。一つは屋根形石棺を存し、他の二つは石室のみなれども、其大なる物は羨道約二丈五尺、玄室一丈六尺あり、切石を以て築ける頗る精巧なるものなり。附近の文殊院及白山神社に參ず、同社は特別保護建造物なれども、屋廡大破に及ぶ。これより山田大寺の金堂及塔の礎石、久米寺鬼院の塔の礎石を檢し、十六夜の月に照され、萬葉の古を偲びつゝ飛鳥街道を辿り、午後六時半頃岡、藥屋旅館に投ず。

翌五日、午前七時半頃旅館を辭し、島庄の大古墳石舞臺に上り下つて玄室に入る。室の長さ二丈五尺幅一丈なり。石の大なる事實に人目を驚ろかす。岡寺に到り、塑造の如意輪觀音を拜し、寶物を拜觀し、開山義淵僧正の墓に詣で、飛鳥平原を望む。下つて奇石酒槽を見、飛鳥神社、飛鳥大佛を拜し、右に雷岡、左に甘樹岡を眺め、飛鳥川に沿ひて下る事數町、推古帝豐浦宮趾に到り、向原寺に參じ、更に川原寺趾に到り、弘福寺の瑪瑙の礎石及塔趾を見、橘寺に到り二面石及大塔礎石を一覽す。山を攀じて菖蒲池古墳に到る。玄室小なれども内面に漆を塗れる精巧なる屋根形石棺二個を安置す。下つて鬼俎、鬼則を見る。天武持統兩帝合葬陵を遙拜し、前方後圓の大なる欽明帝陵及吉備姫王檜隈墓に詣ず。墓前に數個

の石人を配す。更に岩屋山古墳を訪ふ。羨道長さ二丈八尺、玄室長さ一丈五尺、磨礱精巧なる大石室なり。次で牽牛子塚一名御前塚に到る。狹少なれども頗る特色あり、卽石室は凝灰岩を彫り拔きたるものにして、羨道約二尺玄室は中壁を以て左右に分割せられ、各室約四尺立方天井は穹窿狀を爲す。險阻なる密林を攀ぢて罐子塚に達す、これ亦稀有の形式に屬す。南北兩方に各一丈の羨道開口し玄室は大小の石材を以てアーチ狀に築かれたる頗る大なるものなり。道を返して益田碑の趺石と稱せられし石船に上り、丸山古墳、藤原宮趾等を望む。下つて久米寺を訪ひ、橿原神宮、神武天皇陵、綏靖天皇陵を拜し、畝傍驛に着す。かゝる短時日にかくも多くの收穫を得、一同滿足して午後四時の列車に身を托し、七時半京都驛頭に解散せり。〔學生勝峰月溪記〕

● 史學研究會

例會　昨年十月二十一日午後一時半より文學部第六番教室にて開催、左の講演あり、午後五時閉會せり。來會者百三十名。

一、德川初期に於ける國內海運の發達　　會員　文學士　古田　良一君

右は本誌研究欄に揭載せり。

一、歷史の意義に關してギリシャ思想とヘブライ思想　　文學博士　波多野精一君

ギリシア人とヘブライ人とが「歷史的生活」の意味に解した歷史の意義に關して如何なる態度をとつたかを考察して見るに、ギリシャ人は彼等が豐富にして優秀なる文化を產み出したにも係らずその世界觀よりして歷史的生活の特色と價値とを否定したのであつた。ギリシャ人の精神生活を指導したものは初めは詩人であり、次には哲學者であつた。詩人等、例へばアイスキュレス、ソフォクレス、エウリピデス等は實際に於て國民指導の責任と燃ゆるが如き宗教的信仰を感じたにも係らず、ギリシャ人の歷史觀には何等の影響をも及ぼさなかつた。また哲學者等の求めたものは、ソクラテス以前には、初めに普遍的な「自然」次にはロゴスであつて、其處に生滅變化を超越した永遠不變の相を見出さうと努力した。この對象はプラトンに到つてイデアの思想となつたが普遍的永遠的

のものを求めてそれのみに價値ありと認める態度は遂に變らなかつた。即ちギリシア人に於ては、現實的經驗的なる此世の生活は只普遍永遠なるものに與かる限りに於てのみ存在の意義を有するものと見られ、從つて彼等が豐富なる歷史的生活の中にありしにも係らず歷史の深き獨立的意義は遂に理解されずに終つたのであつた。

イスラエル民族に就いて見ると、彼等の文化の精粹は云ふ迄もなく宗教に存じた、即ち彼等の思想を代表するものは豫言者達であつて、彼等はその神ヤーヴエをもつて己の自由なる意志に由つて、さり乍ら常に正しき倫理的信念に從つて何事をも爲し、殊に民族の歷史を思ふがまゝに左右し得る活きた人格神として認めたのであつたヤーヴエは彼等イスラエル人と自然的血緣とも云ふべき關係を有しイスラエル人と運命を共にするヤーヴエであつた。即ち彼等の神はイスラエル人の個性的開展、時間的變化と離すべからざる神であつた。この關係の中に神の道德的意志の實現を含ましめた點が、彼等豫言者をして眞に歷史を自覺した人々と云はしめ得るのである。即ち猶太教の著るしき特色としての倫理的一神教は豫言者等の「歷史」の意義の考察より生れたとも見ることが出來る。

かゝる豫言者等の思想は後のキリスト教の思想の基礎をなし、後にアレキサンドリアのユダヤ人フイロンのロゴス說に於てギリシア哲學の普遍的價値的なるものと結合し遂に豫言者等の歷史の思想を完成したのであつた。

大會　昨年十一月十一日午後一時より京都帝國大學々生集會場階上にて開催先づ庶務會計擔任矢野博士より諸般の報告あり、次の講演に移る。

一、維新前後に於ける我國の外國貿易

會員　文學博士　石橋　五郎君

安政六年の横濱開港時代前後の外國貿易の事情はその研究せられたるもの甚だ尠く、横井時冬博士の日本商業史に明治初年迄の概況を僅に略述せしものあるのみ、編年體の横濱沿革史に徵するに當時神奈川奉行の交迭頻繁を極めたれば統一的記錄の成らざりしものと察せらる。故に今日は主として領事の報告に係る外國史料に據らざるべからざるなり、之によるに幕府の對外貿易の態度は不思議にも輸出貿易に制限を加へ、輸入貿易に寬大なり

しものゝ如く、武具、金、銀、米、麥、生絲、種油等を輸出禁制品としたるが如く、外國領事は皆不平を唱へたりと謂ふ。此の輸出貿易の禁制は鎖國說の申譯としたると共に國產品の消耗を恐れしが爲なるべく、此に對して西洋人はこれ幕府が利益を計るなりと謂ふ誤解を生ぜし程なり、慶應元年の米國領事の報告にも幕末、幕府と諸侯との相爭へるは此の利益の爭奪の爲ならむと謂へるを見る云々。

次に例により評議員十名の改選を行ひ更に次の講演に入る。

一、ジオニズムに就いて

會員　文學博士　村川　堅固君

ジオニズムは猶太人がヘブライ以來の自由の國民に復活して、故鄕地に歸らむとする一思潮にして十七世紀頃より其發端を見る。十九世紀の末に及びウヰーンに在りし Theeodor Herzel 先づ Iudenstaat と稱する著述を公にして猶太人に此の思想を普及すると共に一般の同情を博せむとし、以てパレスチナに獨立國家を創造せむとす、在巴里の Marx Mordaz 之に贊成し一八九七年、バーゼルにて第一回のジオニストコングレスを開くこゝとなり、一八九九年より其の資金調達に從ひ五十萬磅の拂込成り事業開始の端緒に着けり、其後每一年、每三年に小大の會合を爲し一九〇〇は龍動、其他は多くバーゼルに開き、殊に第五回の大會にては三十萬磅の金を集め、其の半額を以てパレスチナに土地を買入れ、其の半額を基金に宛てたり、英國率先して之に同情しウガンダ地方を提供せむとせしが、會員は皆パレスチナを希望し、土耳古の諒解を得るに努めつつある際、偶世界大戰實現し、Dr. Chaym Weizmann, Nahum Skolow 等大に活動する處あり、ヘブライ語の大學設立を考へ一九一五年の實行準備時代より一躍して形の上に運動を實現し、Zionist Review, Palestain 等の機關雜誌さへ發行しつゝあり云々。

右終りて階下別室にて有志晩餐會を開き午後十時散會當日は東京帝國大學より村川博士遠路入洛せられ、一同歡を盡して散會せり、因に評議員改選の結果は坂口昂、內藤虎次郎、喜田貞吉、濱田耕作、桑原隲藏、原勝郎、矢野仁一、三浦周行、小川琢治、羽田亨の十氏にして何れも快諾就任せられたり。

●讀史會

例會　九月二十八日午後六時より學生集會所に於て開催。出席者喜田教授、中村講師、牧、鈴木の兩學士、橋川、梅原、中村、井川、佐古、末岡、加藤、勝峯、小橋、中原、石川、宮崎の諸君にして、左の講演あり。十時散會せり。

一、古墳內部の遺骸埋葬狀態に就いて　　梅原　末治君

其の最も明瞭なる一例をなす朝鮮慶尙南道梁山郡梁山面北亭洞の古墳に就いて、石室內部の狀態を詳述して、埋葬當初の狀を窺ひ、なほ數十葉の寫眞に依り、出土の遺物を示して、本邦上代墳墓との關係に論及せらる。

一、親鸞上人に就て　　文學博士　喜田　貞吉君

先づ俗傳を離れ、當時の情勢其他正確なる史料より概念を組織する必要あり、特に當時の念佛者の地位を考ふる必要ありと冒頭せられ、教行信證にも淨土眞宗興隆大祖源空法師とある如く、最初は淨土宗の一派なりしが、恐らく蓮如以來隆盛となり、獨立したるに非ざるか。これ以前には親鸞を開祖としたるものを見ず、後には鎭西派は親鸞が源空の弟子たる事を認めざれど、これも兩派が激爭してよりの事ならん。次で親鸞の一族、源空との關係を述べられ、最後に本年七、八月歷史地理誌上に發表せられたると略同樣の教行信證に關する博士の持說を略述せらる。

例會　十月二十七日午後六時より開會。出席者中村講師、牧學士、橋川、岩橋、森下、井川、米岡、加藤、佐古、勝峯の諸君にして、外遊中の三浦教授のロンドン通信を朗讀し、左の如き講演あり。十時散會せり。

一、「家」は「棟」に非ず　　佐古　慶三君

幸田學士等の舊說を一言せられて後、元祿時代の新地開發に關する藤川源八の覺書、嘉永六年の人別帳、町中繪圖、其他大阪の古記錄を引用し「家」は棟數に關せざる一區轄、卽屋敷の義なる事を考證せらる。

一、契沖阿闍梨について　　岩橋小彌太君

上賀茂神社三手文庫所藏の今井似閑遺書を調査し、似閑が松下見林、下河邊長流、契沖等に師事せし關係より契沖の事蹟を記するものある事を談ぜられ、次で大阪府

東成郡今里妙法寺より同氏の新に發見せられたる契沖自筆の妙法寺記によりて、妙法寺の情況、祭事、契沖と同寺及淨嚴との關係等を述べられたり。

例會　十一月二十四日午後六時より學生集會所に於て開催。出席者中村講師、魚澄學士、岩橋、森下の諸君及學生數名なり、歐米漫遊中の三浦教授のミュンヘン及ナポリよりの繪葉書を廻覽し、パリよりの通信を朗讀し、次で十二月三日に行はるべき大會の打合はせを爲し、次ぎの如き講演あり。

一、丹波に於ける重なる史料　文學士　魚澄總五郎君

丹波の文明は南北より入れる外、攝津方面より入れるものあり。其中南方の山城文化が最も强く、秦氏の勢力が大いに及び、其關係の神社佛寺固有名詞等あり。北方文化を證すべきものには出雲神社系の神社あり、攝津の其れを證すべきものには多田神社系のものあり、史料は大抵南北朝以後にして、安國寺に最も多く存す。國寶の佛像も各郡二三點づつ有し、國分寺の本尊藥師坐像（平安初期）を以て尤物とす。更に保津村に於ける五苗と曰ふ家柄に論及し、五家族が足利末期に入り從來の小林黨を壓し、德川の階級制度確立策を利用し、優越的地位を占めたる如しと結ばる。

第十三回創立記念大會　十二月三日正午より學生集會所に於て開催場内に山科本願寺遺跡圖、教行信證寫眞淨土往生論註奥書寫眞等を陳列し、四百餘名の熱心なる聽講者を迎へ、先づ學生德重君開會の辭に始り、左の如き講演あり。

一、下河邊長流の國學に就きて　岩橋小彌太君

國學の起源はこれを春滿に係るを以つて通說となせども其の尙古的復古的の學風は契沖に認め得べし、契沖と學問上最も密接なる關係ある長流には其の風なし、長流は木下勝俊の門人なるべく、其の歌學上の先輩とする所は心敬宗祇等なり。當時の和歌の宗匠は古今傳授を標榜したりしも、長流は却つて新しく萬葉傳授を創め、萬葉集研究に一身を委ねたり。契沖は此の影響を受けて古典の研究に力を注ぎ遂に國學の學風を起せしなり。

一、山科本願寺の遺蹟に就いて　橋川　正君

山城國宇治郡山科村大字西野にあり、山科御坊野村御

坊とも曰ふ。園城寺の領地なりし關係上、文明三年蓮如上人が來り坊舍を建てたるならん。同九年落成し、享祿五年法華門徒、佐々木定賴に破らる。城塞の構造を爲し、本丸、二丸、濠等あり、美麗宏大、其附近に自治的の中世都市を現出せし程なりき。秀吉は此の地を本願寺に寄附したりしが、東西に分れてより所謂古屋敷を爭ひ、別院は其外に在り、現今民有地となり、總坪二萬四千坪、北半に鐘紡工場あり。

一、平安朝初期に於ける風俗界の波瀾

文學士　江馬　務君

日本風俗史を通覽するに凡そ四回の大推移あり、卽ち(1)神功皇后征韓後(2)隋唐文化輸入後(3)切支丹傳來後(4)幕末開港後これなり。是等は外來文化の直接影響なるが、國內的原因によるものに平安初期と應仁亂後の二回の變動あり。平安初期に於ては大體に於て前代の餘風を受け、唐風模倣の時代なるが、反動として國民的自覺を生じ、節約奬勵國風保存の運動起る。要するに全然日本化せる藤原時代に至る過渡期にして、明治大正の夫れと酷似せる點に於て一入興味を覺ゆ。

一、室町時代の皇室御領

文學士　中村直勝君

室町時代以前の皇室御領は大覺寺統の八條女院領と、室町女院領半分、持明院統の長講堂領と、室町女院領半分なりしが、建武中興失敗後南朝の財源は社寺等に課せられた朝用分にありき。されど南北合體後は朝用分なく長講堂領と室町女院領半分、及び關錢公事錢が主なるものなりき。然も御領に武士の違亂絕えざりしため、其額は少く至尊自らの染筆料其他勅許料獻金等により支へ給へり。然しこれがため皇室と國民との間に暖き關係が結ばれたり。

一、親鸞上人の筆蹟に就いて辻博士に答ふ

文學博士　喜田　貞吉君

辻博士、本多學士、廣瀨氏の所論を二時間に渡り詳細に駁せられ、新に是等の諸氏に三箇條の疑問を提出せられたり。講演の要旨は他の誌上に發表せらるゝを以て今は唯質問三ヶ條のみを記すべし。

（一）親鸞聖人を以て漢文を正當に讀み得るの能力なき無學の篤信者なりと信ぜらるるか、若し果して然らば敎行信證の如き多數の先德の要文を讀みこなし、これを輯

集して一貫したる教義を大成する程の大著述を爲し得るこ信ぜらるゝか。(二)或は本來充分の讀書力を有せられながらも、自己の教義を立證せんがため故意に先德の要文を曲解し、一時的に愚夫愚婦を瞞着せんこする横着坊主なりこ信ぜらるるか。果して然らば大宗教の祖師こして萬世に仰がれ給ふ如きことがあり得べしこ信ぜらるゝか。(三)教行信證が聖人の著作ならば、著者自ら筆寫し自己の訓讀を誤り、其記述せる史實をも破壞するが如きことあり得べしこ今以てなほ信ぜらるゝか。換言すれば聖人の著作こ眞筆こは兩立し得べしこ今なほ信ぜらるゝか。

右終つて學生三浦君閉會の辭を述べ、盛會裏に大會を終る。時に午後七時。次で階下に於て會員の晩餐會を開き、歡談に夜の更くるを知らず。出席者喜田教授、中村講師、江馬、魚澄、牧、富森、桑原、鈴木の諸學士、橋川、岩橋、島田、森下、江藤、土田、中村、井川、加藤、佐古、末岡、勝峰、山本、三浦、德重の諸君なりき。

●支那學會

例會　昨年十月　日午後六時半より文學部第六番教室にて開催、左の講演あり。

一、東周の意義　文學士　崎山　宗秀君

一、戊戌の政變　文學博士　矢野　仁一君

矢野博士の講演は本誌に掲載せられたり。

大會　昨年十二月十日午後一時より京都帝國大學々生集會場階上にて開催左の講演あり。

一、山東の古代住民　文學士　那波　利貞君

山東の意義時代によりて異なるも今は太行山脈以東の意味に取り、其の後漢以前の樣子を窺はむに古く泰山を中心こして孤島なりし山東半島に住民ありしは疑ふべからず、而も歴史時代に入りては黄河の沖積作用は支那大陸こ山東半島こ連續すれば孤島原住民が大陸方面の支那人こ相當密接なる關係ありしを知るべく所傳の爽鳩氏李山則なごは其の酋長こ察せらる。而して周が呂尚を齊に伯禽を魯に封ぜしはこの土着民族の子孫を懷柔同化する爲の政なるべく、從つて土着民族の子孫こ思はる、萊夷徐夷等は西來支那大陸民族の勢力愈々東に加はるこ共に西方に發展するを得ず、而して海岸山東地方は春秋戰國

の間商業を國本としたれば生活問題は起らざりしも、內地山東地方は農が國本にて春秋の例によりて見れば肥沃の地なれども水旱蟲害多く、之に加ふるに大陸支那の人の東漸の傾向は後世の實例に徵しても略ぼ推想すべければ山東地方の人口は漸次增加したるものなるべく、而も生產力之に伴はざる爲、內地山東地方の土着民の子孫は困窮し、且つ彼等は風俗習慣上大に西來の人と異なる點ありしなれば民族的勢力對抗上劣敗者なると食料問題の爲四方に民族移轉せしものと察せらる。日本書紀等に徵すれば支那人が朝鮮經由我邦に歸化せしことは明であり、而して山東土着民族の信仰と思はるる兵主神社を祀れるより見ればこれ皆山東地方より移住せし山東土着民の子孫なるべく、此に附隨して亡秦の餘族の如きも海外に出でしものと察せらる。此の風は朝鮮方面のみならず江蘇省方にも及びしものの如く、而して彼の徐福の如きは徐夷出身の者なるが其の姓の上より判定し得られざる歟云云。

一、文鏡祕府論を校勘して

文學博士　鈴木　虎雄君

弘法大師の作なる該書は南北朝より唐に至る間の逸書を引用せる點に於て貴重なるが、譬へば梁の沈約の四聲譜、鐘嶸の詩評、劉勰の文心雕龍、隋の劉善經の四聲指歸、唐元兢の詩腦髓、古今詩人秀句の如きありて現行本祕府論の本文の誤を高山寺所藏の古寫本長寛本、無年號大字本の二本に據りて校勘訂正したる、九例を示されたり。

一、佐藤一齋の地體圖說

文學博士　高瀨武次郎君

一齋が易に基き而も地を基として宇宙觀を立てたるは實に卓見なるべく蓋し前人未發の學說たるべし。其の五圈の說明に當り乃至謂風雨霜露。亦自天而降。可謂謬矣蓋地氣上發。必有其限。猶水面也なごは今日の科學的研究の結果を豫言したるもの推賞すべきものなるを謂はれ地體圖說の印刷物を頒與せられて逐字解釋を加へられたり。

一、楊子法言に就て

文學博士　狩野　直喜君

楊子雲の姓の楊が木偏なるか、手偏なるかは明の焦弱侯も謂へる如く疑問あるも楊字正しかるべきことを博引

證明せられ、次に其の生卒に就て漢書の七十一才を以て天鳳五年に死したる說を是とし彼が王莽に仕へたることは明なるも果して所謂御用學者として醜名を流せる程無人格の人なりしや否やを論じ法言の中に王莽に對し不平を述べたる諸點見ゆれば、王莽の爲新國文母誄等は書きしならんも、普通謂ふが如く之に依りて利達を得たるに非ざることを論證し、最後に論語に倣ひたる法言の研究は論語の研究上看過すべからざるものなることを警告せられたり。

右終りて午後五時半より階下別室にて晩餐會あり午後九時散會、來會者八十名頗る盛會なりき。

◎選擇集諸本の展觀

京都帝國大學附屬圖書館司書藤堂祐範師が多年苦心の結果になつた「選擇集大觀」の完成を記念する爲めに、淨土宗義研究會が主催となつて、去る十一月十二日知恩院山內尼衆學校學で選擇集の諸本が展觀せられた。古抄本古刊本から德川時代の新しい刊本まで蒐集の頗る廣いのには驚かされたが、特に注意すべきものとしては、古抄本では往生院本と其の影寫本とが出陳せられてゐた。併し盧山寺本が寫眞で代用せられてゐたのは殘念であつた。古刊本では延應、正中、永享版及び本活字本などで五種の無刊記の版本が研究の結果に基いて略其の年代順に置かれてゐた。知恩院所藏の古版木と寛永十六年の所謂燒版の版木とが出されてゐたのは珍とするに足りよう。選擇集以外のものでは知恩院藏の傳隆信筆法然上人畫像及び七幅繪傳等があつた。當日午後「選擇集の古版について」(藤堂祐範)「選擇集研究の序說」(石井教道)「二尊院の法然廟について」(伊藤祐晃)の講演があつたといふことである。

◎第八回大藏會

京都佛教各宗學校聯合會が毎歲秋期に催して來た大藏會の第八回の展覽會が同十九日山口佛教會館で開かれた。今回は臨濟宗と新義眞言の智山派との擔當だといふ事で、出陳圖書は主として佛教史傳、無著道忠和尙に關したもの及び新義眞言宗諸寺院の藏書であつて、第一の史傳の部では先づ大治元年書寫の歷代三寶記があり、又

東大寺の法華傳記、華嚴傳記、名僧傳指示抄、同要文抄、大宋高僧傳指示抄、同要文抄、日本高僧傳指示抄、同要文抄、等は何れも宗性の自筆又は書寫で、最初の法華傳記は大治の書寫で、後に宗性が題筌を書いてゐる。同寺の弘贊法華傳には宋人將來の高麗本によつて保安元年に書寫したといふ奥書がある。石山寺の龍樹菩薩傳、高僧傳、續高僧傳、大慈恩寺三藏法師傳など皆古い抄本で、又高山寺の胎密付法狀、仁和寺の法滿院血脈抄、海住山寺の解脫上人筆神明帳、舍利記等は注意すべきものであらう。併し最も衆人の目を惹いてゐたのは賴山陽の加筆した慈雲尊者傳であつた。道忠和尚のものは主として妙心寺龍華院の所藏で、本學の藏本も少々混じてゐた。新義眞言宗諸寺院の藏本といふのは寶嚴寺、神照寺、安樂壽院、寶積寺、寶幢院、大報恩寺の六箇寺所藏の聖教で、內寶嚴寺の古寫經は光明皇后の願經を始め、優秀なもの甚だ多く、神照寺の紺紙金泥の法華經、安樂壽院の仁壽三年書寫の大般若經等亦注目すべきものである。此の日午後松本文三郎、羽田亨兩博士の講演があつた筈である。

會報

◉會員動靜

□入　會

東京市神田區三河町二ノ七　島崎　良忠
（右紹介者　藤原猶雪）

東京府南葛飾郡小松川中平井　移川子之藏
（右紹介者　川上多助）

朝鮮京城府景福宮、總督府博物館　小泉　顯夫

大和國磯城郡織田村大字大泉　森本　六爾
（右紹介者　梅原末治）

□退　會

鞍智芳章　播磨史談會　二子石武喜　上田　秀吉

小坂部　薀

◉寄贈交換圖書

日本文化と佛教　谷本富著　丁字屋書店

史學雜誌　每號　史學會

歷史地理　每號	日本歷史地理學會	原稿料　一四三、〇〇〇
國學院雜誌　同	國學院大學	雜誌賣上　五〇、〇〇〇
東洋哲學　同	東洋大學	紙數超過　三六、〇〇〇
經濟論叢　同	經濟學會	雜費　一八、〇〇〇
史學　二ノ一	三田史學會	差引殘額　六二三、二八二
伊豫史談　三一	伊豫史談會	特別會計　一三六、一三〇
		現在總計　七五九、四一二

㊂大正十一年度會計報告

（大正十一年十一月十日現在）

總收入		一〇六〇・七八二
內譯		
前年度繰越金		四一六、四三二
發行所納金		六四〇、〇〇〇
雜收入		四、三五〇
總支出		四三七・五〇〇
內譯		
役員手當		一〇五、〇〇〇
大會費		七五、〇〇〇
例會費		二〇、五〇〇

㊃會費領收報告

大正十年度

安部　立郎　鮎貝房之進　淺賀辰次郎　今井　貫一
明石　國助　勅使河原健之助　小坂部　薀　伏木　誠義
藤原　猶雪　福井利吉郎　岩間　德也　市村讃次郎
伊豫史談會　兒玉　九十　河島松太郎　南坊城良興
西村喜一郎　大島　徹水　佐藤　小吉　阪本廣太郎
高木　善人　高林　誠一　瀧　精一　高雄　義堅
友納　養德　渡邊　世祐　吉川貞次郎　松本　信廣
大村　正之　西田　宏　磯野　寶惠

大正十一年度

三喜田熊三　小牧　實繁　安部　立郎　有田　好繩
蘆田　伊人　鮎貝房之進　末松　吉次　安藤　正次
青地重次郎　阿川　重郎　有高　巖　淺賀辰次郎
安部　秀助　淺見倫太郎　今井　貫一　若月　赳夫
足利　衍述　明石　國助　馬場是一郎　江見　清風
遠藤佐々喜　江藤　徵英　江馬　務　古谷　綱隆
上野　一也　小津龍之助　玉泉　大梁　勅使河原健之助
小坂部　蘊　舟木益五郎　二子石武喜　藤田　穩三
古田　良一　藤田　精一　伏木　誠義　藤原　猶雪
藤田　豐八　福惠　道暢　藤岡　繼平　藤井治左衛門
藤本　了泰　藤塚　鄰　藤井準一郎　福井利吉郎
藤田　信一　廣瀨治兵衛　岩間　德也　平山　政適
弘田　長　長谷外余男　平山　勘次　萩野　由之
羽深　多仲　播磨史談會　堀　鷲五郎　堀　正二
堀田璋左右　原田　淑人　四田　直　樋畑正太郎
本多辰次郎　穗積　陳重　樋口津彌太郎藤井甚太郎
本田　義英　林　五一　日下　無倫　橋本　增吉
濱田　廉　市村讃次郎　伊豫史談會　出雲路通次郎
猪熊　淺麿　飯島　嘉廣　井上　通泰　井野邊茂雄

池内　宏　石田幹之助　入江　義博　稻葉　倉吉
岩松　五郎　石濱純太郎　今井　楢三　岩崎　孫人
岩井　武俊　石原　定孝　伊木　壽一　市川　敏雄
飯岡　左内　板澤　武雄　今井　眞樹　入田　整三
岩田　覺藏　香取　秀眞　柏原　昌三　五條　秀麿
小林　秀雄　小島　祐馬　古賀　德義　神浦萬十郎
小島　捨市　栗田　元次　河鰭　實英　上林敬次郎
川上　孤山　笠井　新也　梶川　榮吉　河村　實
金子　光介　川上　多助　河田　嗣郎　河野　謙
加藤　喜平　神田喜一郎　加藤　繁　甘蔗　晉濟
久保田米齋　黑田俊之亮　木野戸勝隆　岸本　繁造
菊地　仁齡　黑川　眞道　木宮　泰彥　近衛　文麿
北村壽四郎　龜井　高孝　鞍智　芳章　木村　重治
北里　闌　木内重四郎　清岡　猛虎　菊地謙二郎
後藤　守一　兒玉　九十　河島松太郎　森口奈良吉
村川　堅固　松本　俊誠　松井　等　松浦嘉三郎
前川英三郎　牧野　純一　村上直次郎　增澤　淑
諸鹿　央雄　宮地　直一　宮城　信雅　松山　直藏
牧山　清　本山　彥一　村上　秀一　三上　左明

森下　博　宮島　貞亮　森谷　秀亮　三上　參次
三浦　新七　松島　淳　三輪菊三郎　三上　嘉一
三井甲之助　宮崎鉀一郎　森田　實　森田清之助
南坊城良興　丹羽　正義　野田　貞雄　能勢　丑三
野々村戒三　中島利一郎　永峯　光壽　内藤　馬藏
中村　勝麿　中村　孝也　中山再次郎　中村久四郎
中島　俊司　長澤　德文　中岡　清一　中川　泉三
中山平次郎　沼田　頼輔　西村　時彦　西村九郎右衛門
丹羽　圭介　蜷川　第一　仁保　龜松　西村喜一郎
大谷　德馬　太田　虎一　大森金五郎　岡田　播陽
岡崎　文夫　大野　仁夫　大谷　勝眞　大朝京都支局
大類　仲　小田幹次郎　岡村　民二　尾佐竹　猛
小野　武夫　岡久殼三郎　大金　弘道　岡部　讓
大橋德四郎　大阪金太郎　大高　常丸　小川劒三郎
尾崎　庄助　折口　信夫　小野　玄妙　大島　五郎
岡　茂政　大島　徹水　谷大圖書館　李　秀一
李　能和　龍　肅　李　範昇　柳　詒徵
篠田　治策　杉浦　隆次　篠田　周之　杉浦　丘園
鈴木　登　齋藤　遊雲　白石　正邦　白鳥　庫吉

幣原　坦　島　文治郎　志田　義秀　佐野　秀俊
佐々木彌四郎重松　俊章　會我　豐吉　佐々木功成
笹川新太郎　關　信太郎　清水元太郎　白澤　清人
島津家編輯所新見　吉次　坂倉篤太郎　清水　泰次
齊藤清太郎　澁江小摩策　佐々木信綱　佐崎　重暉
下戸前繁松　滋賀　貞　清水　福市　住田　智見
鈴木　重雅　杉村勇次郎　千家　尊統　關　保之助
齋藤　斐章　齋藤　隆次　齋藤　阿晃　佐藤　小吉
阪本廣太郎　島村孝三郎　鳥羽　重節　鳥野　幸次
鳥山　嘉一　時野谷常三郎竹　島　寛　津田左右吉
津金　史香　高尾　常盤　高橋　邦枝　高橋清之助
丹波史談會　田中　秀作　竹岡　勝也　鳥飼　生駒
高橋　欣二　友枝　照雄　富森　大梁　鳥居　龍藏
田中　俊清　田澤　金吾　寺澤　重吉　高木　敏太
圓谷　弘　高巢庄太郎　辻村周次郎　友松　圓諦
谷本　富　辰馬　悅藏　伊達　彌助　建部　遯吾
財部　靜治　武田　五一　玉置由次郎　高橋萬次郎
武田　祐吉　寺田　貞次　谷岡安三郎　竹内　榮喜
武内　義雄　高橋　勝一　高橋　健自　高柳　光壽

玉利　陟　田保橋　潔　津田　三郎　瀧野　貞吉
高木　善人　高林　誠一　龍　精一　高雄　義堅
友納　養德　上村　治八　湯淺　長次　上原菊之助
魚澄惣五郎　上田駿一郎　吳　文炳　上田　三平
上田　秀吉　植木直一郎　內田　寬一　內田　清長
上田　確郎　上原精一郎　浦上　宗衛　和田　清
脇屋　攝謙　鷲尾　順敬　和田　英松　渡邊孫左衛門
渡邊　世祐　山下　寅次　吉川貞次郎　山崎　藤吉
八代　國治　山田新一郎　山下　四郎　吉田　寅藏
吉尾　長吉　山本　行範　山本　元　山村　材美
吉村宇一郎　山田　文昭　柳田　國男　箭內　亘
谷井　濟一　松本　信廣　大村　正之　西田　宏
黑板　勝美　白川　繼紹　新町　德之　今井登志喜
神谷哲太郎　布川　豐　森田　博三　今宮　新
加納川謙一　高橋　俊乘　奧　秀太郎　西田與四郎
平泉　澄　林　森太郎　石川富士雄　山口　浩義
井上　琢磨　龜崎光次郎　仁科　貞人　近重　眞澄
大口　喜六　杉本　正介　木下　寂善　菅　貞好
新堂　順明　鳥羽　耕治　北畠　貞顯　栗原　助作
横地　得三　東川　愛胤　磯野　實惠　中村喜代三
勝峯　月溪　今關　壽麿　小田　省吾　本山　久平
長尾　景治　田邊　勝哉　由比　質　本間良三郎
口石　敬義　鷲淵　一　井川　定慶　石原　昌胤
行德　曄受　本庄榮次郎　下田　禮佐　若山善三郎
富田　仙助　末岡　覺雄　田所　市太　江崎　政忠
西岡虎之助　米田　恭禮　古會部　紀　伊藤　祐晃
猪熊　信男　岡部保次郎

大正十二年度

勝浦　鞆雄　小泉　貞造　太田　勝友　篠田　治策
富田　仙助　辻　善之助　田口　聖炯　八木繁四郎
柳　貫一　白川　繼紹　柴田　喜八　大橋　金造
小津龍之助　羽深　多仲（一、五〇）